

平成 30 年度

病害虫発生予察情報 第 21 号

長期予報

北海道病害虫防除所 平成 31 年 3 月 26 日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

札幌管区気象台発表の 2 月 25 日付の暖候期予報および 3 月 25 日付の 3 か月予報は以下のとおりです。

北海道地方 3 か月・暖候期予報

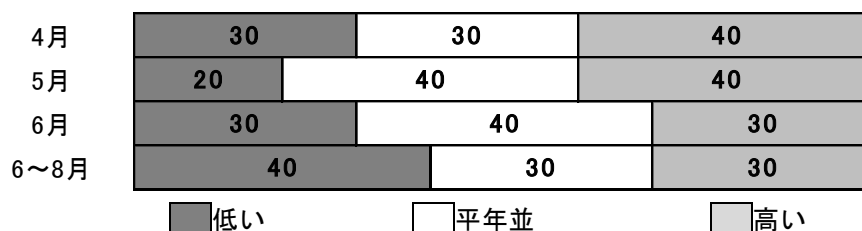
(4 月から 8 月までの天候見通し)

暖候期 平成 31 年 2 月 25 日

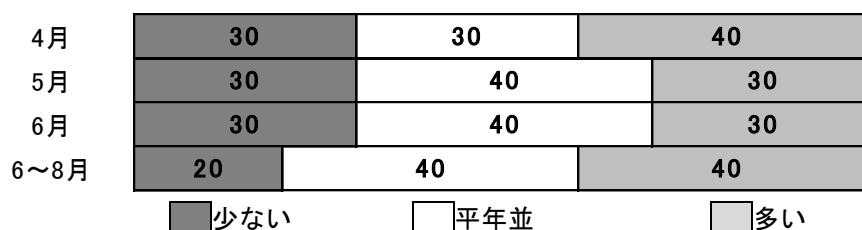
3 か月 平成 31 年 3 月 25 日

札幌管区気象台発表

< 気温の各階級の確率 (%) >



< 降水量の各階級の確率 (%) >



春 (4 月) : 天気は数日の周期で変わり、北海道太平洋側では平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

(5 月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに 40% です。

夏 (6 月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。

(6 月から 8 月) : 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。
この期間の降水量は、平年並または多い確率ともに 40% です。

平成 31 年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎:やや多～多、□:並、△:やや少～少を示す

注2) 近年の発生状況の()は、平年値がなかったため暫定的な評価

注3) あぶらな科野菜における近年の発生状況はキャベツでの発生量

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		26	27	28	29	30	発生期	発生量
水稲	いもち病(葉)	△	△	△	△	△	並	並
	いもち病(穂)	△	△	△	△	△	並	並
	紋枯病(疑似紋枯症を含む)	◎	◎	◎	◎	□	並	並
	縞葉枯病	△	□	□	□	□	—	並
	ばか苗病	□	□	□	□	□	—	並
	苗立枯病	△	□	□	□	□	—	少
	種子伝染性細菌病	△	△	△	△	△	—	少
	ニカメイガ	△	△	△	△	△	—	少
	ヒメビウンカ	□	□	◎	◎	□	やや早	並
	イネドロオウムシ	△	△	△	△	△	並	並
	アカヒゲホソドリカスミカメ	△	△	△	△	△	並	やや少
	イネミギワバエ	◎	◎	◎	□	◎	やや早	並
フタオビコヤガ	△	△	△	△	△	並	少	
秋まき小麦	赤さび病	□	△	△	△	◎	やや早	やや多
	うどんこ病	△	△	△	△	△	並	やや少
	眼紋病	△	△	△	△	△	—	少
	赤かび病	△	△	◎	△	◎	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	△	△	□	□	◎	—	やや多
	ムギキモグリバエ	△	△	△	△	△	やや早	並
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	△	△	□	◎	◎	—	並
	ムギキモグリバエ	(△)	(△)	△	△	△	やや早	並
大豆	べと病	△	△	△	□	△	並	並
	わい化病	△	△	□	□	□	—	やや少
	マメシンクイガ	◎	□	□	□	△	並	やや少
	食葉性鱗翅目幼虫	◎	△	△	△	△	並	やや少
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	並
小豆	菌核病	△	△	□	□	△	並	並
	灰色かび病	△	△	□	◎	□	並	並
	茎疫病	△	△	△	□	□	—	やや多
	食葉性鱗翅目幼虫	□	△	△	□	□	並	やや少
菜豆	菌核病	△	△	□	□	△	並	並
	灰色かび病	△	△	□	△	△	並	並
	黄化病	△	□	□	□	△	—	やや少
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	並

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		26	27	28	29	30	発生期	発生量
ばれいしょ	疫病	△	△	△	△	△	並	やや多
	軟腐病	□	□	◎	◎	◎	—	やや多
	黒あし病	□	□	◎	◎	□	—	並
	そうか病	□	□	△	△	△	—	やや少
	粉状そうか病	△	△	□	△	□	—	やや多
	アブラムシ類	□	◎	△	△	△	やや早	やや少
てんさい	褐斑病	□	△	□	△	△	並	並
	根腐病(黒根病含)	△	△	◎	△	△	—	やや少
	黄化病(旧 西部萎黄病)	—	(□)	(△)	(△)	△	—	やや少
	ヨトウガ (第1回)	◎	△	△	△	△	やや早	やや少
	ヨトウガ (第2回)	◎	△	△	△	△	並	やや少
たまねぎ	白斑葉枯病	△	△	△	△	□	並	並
	軟腐病	△	△	◎	□	◎	—	並
	乾腐病	□	△	△	△	△	—	やや少
	タネキハエ(タネハエを含む)	△	△	△	△	△	—	並
	ネギアザミウマ	◎	◎	◎	△	△	並	やや少
	ネギハモグリバエ	—	—	(△)	(△)	△	やや早	やや少
だいこん	軟腐病	△	□	◎	△	□	—	やや多
	キスジトビハムシ	△	△	△	△	△	—	やや少
あぶらな科 野菜	コナガ	△	△	△	△	△	—	やや少
	ヨトウガ	□	△	△	△	△	やや早	やや少
りんご	モニリア病	△	△	△	△	△	やや遅	少
	黒星病	◎	◎	◎	◎	◎	早	多
	斑点落葉病	◎	◎	◎	◎	◎	並	やや多
	腐らん病	□	◎	◎	◎	◎	—	多
	ハマキムシ類	◎	△	△	△	△	やや早	やや少
	モモンクイガ	◎	◎	△	△	△	並	やや少
	ハダニ類	△	△	△	△	△	並	やや少
	キンモンホリガ	△	△	△	△	△	並	やや少

平成 31 年度に多発が予想される病害虫

1. 小麦の赤さび病

平成 31 年は本病の初発時期である 5 月の気温がやや高いと予報されており、本病の発生にやや好適な条件が予想される。主要品種「きたほなみ」は抵抗性“やや強”であるものの、近年多発生となる場合がみられている。そのため「きたほなみ」においても、止葉抽出期までに下葉に病斑が目立つ場合には、止葉抽出期から穂孕期に薬剤散布を行う。

2. 春まき小麦の赤かび病

平成 31 年は暖候期(6～8月)の降水量がやや多いと予報されており、本病の感染に重要な時期に降雨が予想される。防除においては、開花始以降の薬剤散布を適切に実施する。

3. 小豆の茎疫病

平成31年は暖候期（6～8月）の降水量がやや多いと予報されている。本病は土壌水分が高くなる場合に発病が激しくなるため、特に水田転換畑などではほ場の排水対策を実施する。培土処理や高畦処理も有効である。本病は土壌伝染するため、連作を避けるとともに発病しやすいほ場では抵抗性品種の栽培を検討する。本病は発病後に薬剤を散布しても効果が得られないので、大雨が予想される場合には予防的に薬剤を散布する。

4. ばれいしょの疫病

平成31年は暖候期（6～8月）の降水量がやや多いと予報されている。本病は降雨により多湿になると急速にまん延するため、注意が必要がある。発病後の薬剤散布では十分な効果が得られないため、初発生期予測システム（FLABS）を活用し、初発前からの予防散布を心がける。茎葉の疫病に効果があっても本病原菌による塊茎腐敗に対しては効果がない薬剤があるため注意する。

5. ばれいしょの軟腐病

本病は7～8月が高温多雨の時に発生しやすい。平成31年は暖候期（6～8月）の気温は平年並であるものの、降水量がやや多いと予報されているため、本病の発生にやや好適な条件と予想される。茎葉の過繁茂を避けるために適切な施肥量とし、初発後は直ちに薬剤散布を実施する。薬剤によっては感受性低下菌の発生が確認されているため、連用を避けてローテーション散布を心がける。

6. ばれいしょの粉状そうか病

本病は土壌が多湿になると発生しやすい。平成31年は暖候期（6～8月）の降水量がやや多いと予報されているため、注意が必要である。健全な種いもを使用し、常発ほ場においては抵抗性品種の作付や薬剤の全面土壌混和を行う。

7. だいこんの軟腐病

平成31年は暖候期（6～8月）の気温は平年並であるものの、降水量がやや多いと予報されている。本病は高温・多雨の条件により発生が助長されるため、特に夏どり栽培においては注意が必要である。抵抗性品種を栽培するとともに、窒素肥沃度の高いほ場では減肥し、適期収穫を心がける。感受性低下菌の発生している薬剤もあるため、薬剤の選択にも注意する。

8. りんごの黒星病

本病は、ほとんど発生を見ない年が続いていたが、近年多発傾向が続いており、感染源となるりんご葉や芽での越冬菌が多く残っていると推察される。また、暖候期（6～8月）の降水量がやや多いと予報されており、発病に好適な条件となりやすいと予想される。QoI 剤耐性菌とDMI 剤感受性低下菌の発生が確認されている地域があるため、薬剤の選択に注意する。これまで散布水量の不足や散布ムラによる多発事例も確認されていることから、薬剤の散布水量に気をつけて丁寧に散布を行う。重点防除期（開花直前から落花期）はもちろんのこと、それ以降も本病に対する薬剤散布は間隔が開きすぎないように行う。苗木においても成木と同様に防除を実施する。

9. りんごの斑点落葉病

近年、本病に感受性の品種が多く栽培されている渡島、留萌地方において多発傾向が続いている。平成31年は暖候期（6～8月）の気温は平年並であるものの、降水量がやや多いと予報されている。また、本病に感受性の品種である「王林」の作付も増えていることから、平年よりやや多い発生が予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。

10. りんごの腐らん病

近年、本病の多発傾向が続いていることにより伝染源密度は高い。また、平成30年には台風等が北海道周辺を通過しており、樹体損傷により本病に感染しやすい条件となっていることから、平成31年も発生量が多くなることが予想される。病患部からは冬期間を除きほぼ通年孢子が分散されるため、りんご枝の切り落としおよび病患部の削り取りを行い、切り取った枝や削り取った樹皮は必ず園外に持ち出して適切に処分する。夏季になるとりんご病が見分けづらくなるため、注意する。病原菌は主に傷口を侵入門戸とするため、樹体の損傷を抑える栽培管理を行うことはもちろんのこと、削り取った傷口、せん定などによってできた切り口には殺菌剤を含んだゆ合剤を塗布するとともに薬剤散布も行い、本病に感染しないよう管理する。